

# 雲戀へば地底の蟻があふれいづ

藤田湘子

「虻数分にこにことわが傍にゐし」「木蓮の声なら判る気もすなり」遺句集『てんてん』を読んでいると、小さな生き物や草木と交感する湘子の息遣いがあちこちに感じられて、そのまなざしに癒されたり、最晩年の孤心にふれて切なくなったり、さまざまの感慨を受ける。

掲句は三十二歳の作だが、晩年の作者は「私はいま小動物の句をわりあい好んで作るが、発端はどうやらこのあたりにあるようだ。小動物を相手にしているときの私は、平穩である。」と、この句について書いている。

雲もまた湘子のまなざしの向かうところだ。雲に心を遊ばせた眼を地に落とすと、そこには地底から次々と蟻があふれ出た。天地の静かな営みに心が平らかになる。

1958年(23作) 第二句集『雲の流域』 鑑賞・野本京